
非典型的な外観を呈し、肛門管への浸潤をきたした肛門部基底細胞癌の1例

水野嵩彬¹⁾, 島本純子¹⁾, 櫛田哲史²⁾, 恒松一郎³⁾, 古川福実¹⁾
(高槻赤十字病院 皮膚科¹⁾, 高槻赤十字病院 形成外科²⁾,
高槻赤十字病院 消化器外科³⁾)

症例は84歳男性。5か月前より肛門部の皮疹を自覚し改善ないため当科受診した。肛門部9時方向に25mm大のびらんを伴う褐色紅斑局面を認めた。3群ステロイドを外用するも不変であり皮膚生検し、基底細胞癌の所見であった。下部消化管内視鏡検査にて肛門管への浸潤を認めた。当院消化器外科・形成外科・皮膚科にて5mmマージンでの拡大切除術・動脈皮弁術を行った。術中迅速にて、複数回、肛門管側の水平断端が陽性であった。直腸狭窄のリスクのため追加切除や術後放射線療法を行わず、慎重に経過観察の方針とした。術後5か月再発なく経過している。肛門周囲の基底細胞癌は全基底細胞癌中0.2%以下の頻度である。肛門管内に浸潤する肛門部基底細胞癌はさらに稀であり、確認する限り日本国内での報告はなかった。今回我々は非典型的な外観を呈し、肛門管への浸潤をきたした肛門部基底細胞癌を経験したため、若干の文献学的考察を加え報告する。